青藍会グループ広報誌　2025.4.1発行

Heart News

2025
4
第308号

あんの循環器・総合クリニック

4月1日より、あんの循環器内科は「あんの循環器・総合クリニック」に名称が変わりました。また、より多くの患者様に迅速かつ円滑な診療を提供できるよう、診察室を増設しました。
(関連記事：本誌2～3ページ)

INDEX

P2　あんの循環器・総合クリニック名称変更のご挨拶
P3　副院長着任のご挨拶
P3　膠原病内科始まります
P4　青藍会グループ代表挨拶／第16回青藍会グループ成果発表会
P5　20年永年勤続表彰者／10年永年勤続表彰者
P6～7　永年勤続表彰者
P8～9　2024年度青藍会グループの取り組み
P10～11　飲み込みサポート～施設から在宅へ～
P12～13　ナースコール一体型見守りセンサー(Owl Care)の導入による成果
P14～15　青藍会グループ　医師紹介
P16　外来・訪問診療医師予定表

青藍会お客様サポートセンター
ハートコール
0120(2)81056
(受付)8:30～18:00(日・祝・GW・お盆・年末年始などの所定の定休日を除く)

青藍会公式サイト
働くスタッフの声
青藍会LINE公式アカウント
青藍会Facebook

あんの循環器・総合クリニック名称変更のご挨拶

青藍会グループ　代表　**阿武　義人**

春寒の候、皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび2025年4月1日より、当院の名称を「あんの循環器内科」から「あんの循環器・総合クリニック」へ変更いたしました。これまで当院では、内科・循環器内科・脳神経外科・小児科・リハビリテーション科を標榜科目としてまいりましたが、2022年6月より皮膚科・形成外科の専門医を迎え入れたのを皮切りに眼科・整形外科・耳鼻咽喉科など、各分野の専門医を充実させ、より広範な総合診療体制を構築いたしました。これに伴い、リハビリセンター（デイケアルーム）を改修し、外来診察室を6室増設して、診療体制を一層充実させております。

1990年の開院以来、地域の皆様に親しまれてきた「あんの循環器内科」という名称を残しつつも、新たな診療体制を反映させるため、この度名称を変更することとなりました。「あんの循環器・総合クリニック」という新しい名称には、これからも地域の皆様と共に歩んでいく決意を込めております。この第一歩が、今後一層信頼され、愛されるクリニックとなるよう、スタッフ一同尽力してまいります。

これまで当院にご来院いただいた皆様には、今後も変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。また、今後とも質の高い医療の提供に努め、皆様の信頼に応えてまいりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

新たな名称でのスタートにあたり、患者様一人ひとりに寄り添い、より一層安心してご来院いただける環境を整えてまいります。引き続き、変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

あんの循環器・総合クリニック
院長　**亀田　秀樹**

青藍会グループの核として「あんの循環器・総合クリニック」は、循環器内科を主体に、①外来機能拡充、②在宅医療の拡充、③入院施設や併設老健などの円滑な運用を目指し取り組んでいきます。

クリニックの顔である外来部門機能の充実は今後必須の課題です。またこれは訪問診療の充実に反映します。主たる診療科の循環器内科は常勤スタッフが4月から増員になりました。循環器内科の診療は今まで以上に充実します。また直近では膠原病内科が新たな診療科として始まります。今後も患者様にとっての利便性やニーズをリサーチし、外来診療科目や診療内容を検討し、充実させていきます。当クリニックは「機能強化型」在宅療養支援診療所です。各診療科の外来が一体になり総合的に診療にあたる体制を整備し、各専門医が専門性を堅持しつつ、住み慣れた地域での生活を支えるため、患者様とそのご家族に寄り添った在宅医療を提供し、また急な体調変化の際の受け入れや急性期病院からの在宅復帰に向け、入院施設や併設老健などとの円滑な運用を図りながら今まで以上に多職種連携による積極的な支援の充実を目指していきます。

山口市の地域包括ケアシステムにおいて、あんの循環器・総合クリニックが地域の皆様から選んでいただけるクリニックになるよう、職員一同力を合わせて取り組んでまいります。

副院長着任のご挨拶

あんの循環器・総合クリニック
副院長　小野（おの）　史朗（しろう）

4月1日より、あんの循環器・総合クリニックの副院長に就任しました小野 史朗と申します。岡山県出身で、総社高校を卒業後、1977年に山口大学医学部に入学し、1983年には山口大学第二内科に入局しました。入局後は松﨑益徳先生のもとで学び、心エコー班に所属していました。当時、阿武義人先生が班長としてご活躍されていたことを思い出し、懐かしく感じるとともに、さまざまなご指導をいただき心から感謝しています。

1987年に大学院を卒業し、その後、1990年12月から1993年3月までカリフォルニア大学サンディエゴ校に留学しました。そこでProf. John Ross Jr.に師事し、非常に貴重な経験をさせていただきました。この経験は、今後の医師人生に大きな糧となり、松﨑先生には深く感謝しています。

帰国後は下関医師会病院や大学病院で勤務し、1999年11月からは済生会山口総合病院に赴任しました。済生会での勤務を通じて、心臓カテーテル検査を学び、カテーテル治療に対する関心が高まり、新たな挑戦を始めました。著名な先生方を招いてワークショップを開いたり、全国各地で開催されるカテライブに参加することで、PCI（経皮的冠動脈インターベンション）の技術を向上させる努力を続けてきました。

また、他の医療施設との交流の機会が増え、良い点を積極的に取り入れ、チーム医療の向上にも力を入れてきました。特に福島県の星総合病院との交流では、コメディカルスタッフの教育や育成に力を注ぎ、看護師を中心としたコメディカルチームの充実にも取り組みました。カテライブの重要性を感じ、2013年からは山口でYUDA Live Demonstrationを開催し、全国から多くの著名な先生方にご参加いただき、2019年まで山口から情報発信を行いました。

これからは急性期医療に加えて、プライマリーケアや慢性期医療がますます重要になると考えています。高齢化社会が進む中で、患者さん一人ひとりに応じたケアが求められています。少しでも元気に日常を過ごせるよう、患者さんに寄り添った医療を心がけていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

膠原病内科始まります

膠原病は、免疫の異常によって全身の様々な部位で炎症が引き起こされる疾患で、関節炎、皮膚症状、内臓の障害など、様々な症状を引き起こします。

こんなお困りごとありませんか？

膠原病の診断・治療

各種検査（血液検査、画像診断、抗体検査など）
薬物療法（免疫抑制剤や生物学的製剤など）
生活習慣やリハビリテーションに関するアドバイス

膠原病に関するご不安やご質問があれば、お気軽にご相談ください。

着任のご挨拶

膠原病内科
勝又（かつまた）　野歩（のぶ）

産業医科大学第一内科から参りました、勝又野歩と申します。膠原病やリウマチに悩まれている患者様が気軽に通院できるよう、患者様一人ひとりの不安や悩みに寄り添い、心身共にサポートできるよう尽力いたします。新設外来ですので、一般内科分野も広く診察したいと思っております。地域の皆様が安心して治療を受けられる場所を提供できるよう、全力で取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

青藍会グループ代表挨拶
第16回青藍会グループ成果発表会

青藍会グループ　代表　**阿武　義人**

2024年は、災害の激甚化、異常気象の恒常化、国際情勢の緊迫化・不安定化が顕著となった年でした。ヘルスケアの分野では、物価高騰や人材難の中で医療・介護・障がい福祉の報酬改定が行われました。表面的にはプラス改定ではありますが、実質的にはマイナス改定と言えるものでした。地域の医療機関や介護事業者の苦境が示すように、事業環境は厳しさを増しています。

その中で、青藍会グループは激変する外部環境に対応すべく、地域ニーズに合わせたサービス拡大やサービス形態の変更、統廃合、新規事業をスピード感をもって確実に実施していきます。また、DX（デジタルトランスフォーメーション）による業務効率の向上、ひいては職員1人ひとりの生産性を高め、ご利用者様の豊かさ、職員の豊かさの実現を目指し、地域の医療・福祉の一翼を担う組織として、地域の方々の生活を支え続けていきます。

第16回となる今回の青藍会グループ成果発表会ですが、永年勤続表彰では、勤続20年が17名、勤続10年が39名と昨年に引き続き過去最多数の永年勤続者を表彰します。多くの職員が青藍会グループに長く貢献し、誇りとやりがいを持って業務に取り組まれている証左だと感謝しています。

取組み発表では、日頃の業務の中で、より高い成果を上げる取り組みを発表しています。青藍会グループの先進的な取り組みを知ることにより、職員間の共通理解を深めて連携体制を強化し、更には地域社会への貢献に繋がることを期待しています。

最後に、成果発表会を開催するにあたり、発表者及び運営に尽力いただいた実行委員の方々のご苦労に感謝し、挨拶といたします。

2025年3月15日

20年永年勤続表彰代表者挨拶

人事部　部長

このたびは、永年勤続表彰の場を頂戴し、誠に光栄に思います。表彰者を代表し、一言ご挨拶させていただきます。

私たちが入職をした2004年は、ハートホーム新山口が開設した年でした。前年には、ハートホーム平川とハートホーム南山口が開設され、青藍会グループが現在の地域を面で支えるためのサービス基盤整備の時期でした。

あれから20年が経過し、現在の青藍会グループは、地域の医療・福祉サービスの基盤整備とあわせて地域の雇用促進、地域活性化のための保険外事業の展開など、地域をより豊かにするための企業と成長しました。私個人も、この20年間、本部各課をはじめ、介護・障がい・食事・保育・日本語学校とさまざまな事業を経験し、現在は管理職として今の仕事に従事しております。この20年間は決して平坦な道のりではありませんでしたが、代表、副代表はじめ、諸先輩、そして同僚や部下が支えてくれたおかげで今日を迎えることができます。これまで温かく見守っていただいた皆さまには、心から感謝申し上げます。

ひとつの節目を迎えたいま、次の目標である勤続30年に向けて、青藍会グループの更なる発展に貢献できるように、そして、医療・福祉サービスを必要とされている地域の方々のために、今後も仕事に尽力してまいりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

本日はありがとうございました。

10年永年勤続表彰代表者挨拶

中央支店長

本日は、10年勤続表彰者を代表して、ご挨拶させていただきます。

私がこの仕事に就いたのは10年前のことでした。介護の世界に飛び込んだ当初は、右も左も分からず、不安でいっぱいでした。しかし、優しく指導してくださった上司や先輩方、そして支え合いながら働く同僚のおかげで、少しずつ成長することができました。

この10年間で、さまざまな経験を積ませていただきました。デイケアセンターでの勤務を経て、ハートホーム山口老健に異動し、新たな環境の中で挑戦を続けてきました。困難なこともありましたが、利用者様の笑顔や「ありがとう」の言葉に励まされ、そのたびにこの仕事のやりがいを実感しました。

また、仕事を通じて学んだことの一つに「挑戦することの大切さ」があります。

例えば、新規事業としてウェルネスセンター中央を開設した際、準備から運営まで多くの課題に直面しました。施設の立ち上げに伴う手続きや設備の準備、職員の配置や勤務体制、利用者様の受け入れなど、一つひとつが手探りの状態でした。

そんな中、スタッフ同士で意見を出し合いながら取り組み、少しずつ形になっていきました。そして、初めて利用者様をお迎えした際、「ここに来てよかった」「安心して過ごせる」と言っていただいたとき、挑戦して本当によかったと感じました。

この経験を通じて、どんなに困難な状況でも、一歩ずつ前に進むこと、そして職員同士が協力しながら取り組むことの大切さを改めて実感しました。

これからも初心を忘れず、さらに学び、スキルアップを目指しながら、地域の方々にとってより良い支援ができるよう努力してまいります。また、これまで支えてくださった皆様への感謝の気持ちを胸に、今後は自分自身が後輩の支えとなれるよう努めていきたいと思います。

最後になりますが、この10年間、多くの方々に支えていただきましたことを心より感謝申し上げます。これからもスタッフと共に成長し、施設の発展に貢献できるよう励んでまいります。

本日は誠にありがとうございました。

永年勤続表彰者

（入職順、2025年４月１日現在の所属）

20年永年勤続表彰者（17名）

青藍会在宅医療支援センター山口
定期巡回・随時対応型訪問介護看護
介護助手

はあと保育園吉敷
栄養士

管理本部
人事部　部長

青藍会在宅医療支援センター山口
在宅マネジメントセンター
ケアマネジャー

ハートホーム南山口
脳活性リハビリ
介護福祉士

青藍会在宅医療支援センター南山口
看護小規模多機能型居宅介護
介護福祉士

障がい部（こども）事務長
児童発達支援管理責任者
介護福祉士

青藍会在宅医療支援センター山口
訪問看護ステーション 事業所長
看護師

はあとサポート山口
清掃

青藍会在宅医療支援センター中央
定期巡回・随時対応型訪問介護看護
介護助手

青藍会在宅医療支援センター新山口
定期巡回・随時対応型訪問介護看護
介護福祉士

青藍会在宅医療支援センター中央
定期巡回・随時対応型訪問介護看護
介護福祉士

管理本部
総務部　次長

あんの循環器・総合クリニック
事務

特別養護老人ホーム
ハートホーム宮野
介護福祉士

管理本部
人事部 人事課
事務

青藍会在宅医療支援センター中央
定期巡回・随時対応型訪問介護看護
介護福祉士

10年永年勤続表彰者（39名）

ハートホーム南山口ショートステイ
介護福祉士

はあと保育園中央
保育士

ハートホーム山口デイケア
介護福祉士

青藍会在宅医療支援センター新山口
ヘルパーステーション
介護福祉士

ハートホーム宮野脳活性リハビリ
事業所長
実務者研修

あんの循環器・総合クリニックデイケア
認知症介護基礎研修

はあと保育園吉敷
保育士

特別養護老人ホーム
ハートホーム宮野
介護福祉士

ウェルネスセンター中央
デイトレセンター
介護福祉士

青藍会在宅医療支援センター新山口
訪問看護ステーション
看護師

青藍会在宅医療支援センター新山口
訪問看護ステーション
看護師

ハートホーム平川脳活性リハビリ
介護福祉士

青藍会在宅医療支援センター中央
定期巡回・随時対応型訪問介護看護
介護福祉士

あんの循環器・総合クリニック
事務

青藍会在宅医療支援センター新山口
定期巡回・随時対応型訪問介護看護
介護福祉士

管理本部
総務部 総務課 課長

はあとm＋M３W新山口
生活支援員
介護福祉士

はあとf＋j小郡南 事業所長
サービス管理責任者
介護福祉士

特別養護老人ホーム
ハートホーム宮野
介護福祉士

ハートホーム小郡あんしんホーム
清掃

青藍会在宅医療支援センター新山口
定期巡回・随時対応型訪問介護看護
介護福祉士

ハートホーム山口デイケア
介護福祉士

ハートクリニック南山口
主任
准看護師

ハートホーム小郡脳活性リハビリ
実務者研修

経営戦略本部
広報課 課長

ハートハウス吉敷脳活性リハビリ
初任者研修

財務部
請求センター

はあとf＋j小郡南
指導員
介護福祉士

はあと保育園新山口
保育士

青藍会在宅医療支援センター中央
定期巡回・随時対応型訪問介護看護
介護福祉士

あんの循環器・総合クリニック
看護師

ハートホーム小郡
小規模多機能型居宅介護
ヘルパー２級

ハートクリニック南山口デイケア
作業療法士

はあとキッズi新山口
児童指導員

中央支店長

ウェルネスセンター中央
デイトレセンター
事業所長
介護福祉士

老人保健施設ハートホーム山口
介護福祉士

ハートクリニック南山口デイケア
理学療法士

はあと保育園新山口
保育士

2024年度青藍会グループの取り組み

4月

2024.4.1 はあと保育園新山口 入園式

2024.4.5
はあと m+M2 新山口お花見

2024.4.17
はあと保育園中央
こいのぼり掲揚式

5月

2024.5.19
ハートハウス大歳 脳活性リハビリ
レノファ山口応援

6月

2024.6.1
ハートこどもクリニック新山口名称変更

2024.6.27
新卒ベスト返還式

7月

2024.7.24
ウェルネスセンター中央
デイトレセンター
かき氷イベント

2024.7.24 市民総踊り

8月

2024.8.22
ハートハウス吉敷
脳活性リハビリ
夏祭り

2024.8.25
陶地区老人クラブ連合会にて
ハートクリニック南山口
管理栄養士講演

9月

2024.9.7
はあと保育園吉敷 OYA 塾
「給食試食会」

2024.9.18
ハートホーム南山口
敬老会

2024.9.28
ハートフェスティバル in 新山口

10月

2024.10.5
はあと保育園新山口 運動会

2024.10.27 まちじゅう DAY ×
ウェルネスセンター中央
メディフィットクラブ

2024.10.28
ハートホーム小郡脳活性リハビリ
いもほり in はあと農園

11月

2024.11.17
親子 Festival

2024.11.18
オレンジカフェよしき

2024.11.30 山口県障害者芸術文化祭

12月

2024.12.19
ウェルネスセンター中央
デイトレセンター
外出訓練 瑠璃光寺

2024.12.21
はあとカフェ山口
「野田学園合唱」

1月

2025.1.24
ハートハウス大歳 はあとカフェ
「いちご狩りに行こう」

2月

2025.2.20
実務者研修修了式

2025.2.19
はあと W 中央
スキルアップ研修

3月

2025.3.7 喀痰吸引等研修修了式

2025.3.15 はあと日本語学校 卒業式

飲み込みサポート ～施設から在宅へ～

老人保健施設ハートホーム山口
事業所長

１．はじめに

青藍会飲み込みサポートチームでは、利用者様の自立の為「口から食べる」ことを最後まで継続できるように支援することを目的に、さまざまな職種の職員が多職種協働でケアに取り組んでいます。

２．取り組んだ課題

「口から食べる」に着目した時に、各職種がそれぞれに支援をしている状況であり、連携部分が希薄だったため、３年計画で青藍会グループとしての「口から食べる」の支援を検討しました。

１年目：飲み込みサポートチーム発足・お口の手帳発行
２年目：飲み込みサポートチームの周知・定着
３年目：各支店での飲み込みサポートチーム活用

としています。

今年は、１年目の活動について報告します。

まずは、「口から食べること」を最後まで支援するために必要な食べられない原因を模索して原因を追究し、改善を目的として、飲み込みサポートチームを2024年３月14日に発足しました。

チーム構成の職種としては、医師（嚥下内視鏡検査（VE）担当）歯科医師・歯科衛生士・言語聴覚士・管理栄養士・理学療法士・作業療法士です。

チーム発足時に、各職種の役割分担についても話し合い、それぞれの職種の専門分野からアプローチをして改善を目指します。

３．具体的な取り組み

①情報共有

今までは各々のサービス・職種が実施した治療・訓練内容が共有されておらず、どんな治療が行われているのか、訓練がどのように進んでいるのかそれぞれの職種が把握できていない状態で一貫性がなく、そのために、治療・訓練が変更された場合の共有もできておらず、訓練が途中で変更・終了することもありました。

課題を解決するにあたり、科学的根拠をもとに評価をすることに着目しました。

入所時には言語聴覚士による飲み込みの評価を行い、科学的根拠をもとに評価をした方が良い場合には、嚥下内視鏡（VE）検査を実施し、医師の指示のもと訓練方法を確定・実施を徹底しました。

VE検査により障害がどこにあるのかを特定し集中して訓練が実施可能となりました。

その結果をもとに、食事形態の変更、とろみの強度の変更等の基準となり、エビデンスのある食事形態を医師・言語聴覚士・管理栄養士で選定することができるようになりました。

医師の判断にて、１度で評価が終了し訓練に入る方と、継続的な検査等が必要な方は、毎月評価の実施と嚥下状態の確認をし、訓練の方向性の修正を行っています。

表示されている表が、VE検査の報告書になります。

検査時の嚥下姿勢・各々の形態での口腔内残留・残留部位の記載されています。

検査結果をもとに、食事形態も含め訓練方法が検討されて記載されています。

②飲み込みサポートミーティングの実施

月１回飲み込みサポートメンバーで情報共有を行い、それぞれの職種での問題点を挙げチームとしての改善を図っていきます。

職種によって見る視点が異なりそれぞれの擦り合わせ・意見交換を実施します。

サポートチーム発足時には、それぞれの職種での課題等を話合ってきましたが、ここ最近では、各支店での口腔ケアの状況や介護士・看護師への指導の調整などもこのミーティングで実施します。

４．活動の成果と評価

お口の手帳の作成

情報共有をする為のツールとして、各職種の治療経過・訓練を記載し時系列で経過を追えるように作成しました。記録ツールを一つにすることにより治療の経過・訓練変更・継続がどのサービスでも確認できるようになり、統一ケアの実践のためにも食事形態・食事方法の記載も行うことになりました。

現在の配布数は１２８冊となっており口腔・嚥下に関わる利用者様に配布しています。

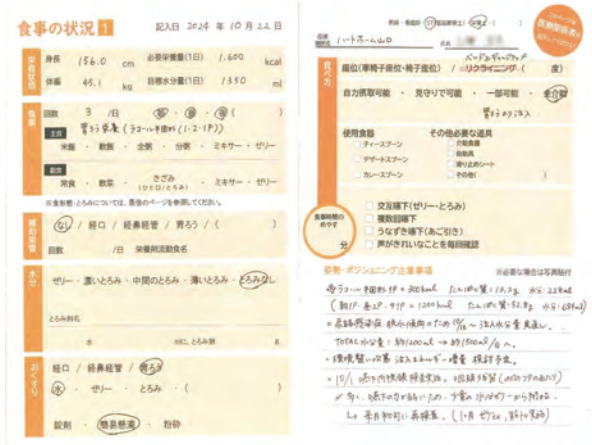
お口の手帳は１人１冊飲み込みサポートチームの関わりが始まった時点で発行します。

①歯科の情報

歯の状態を見てわかるようにしています。欠損部位やブリッチの部分義歯の有無、口腔内の汚れや乾燥状態・歯や歯肉・舌に関わる部分が記載されています。

②食事・栄養状態

身長・体重・必要カロリー・目標水分量が記載されています。とろみの状態や食事形態も記載されており利用者様がどんな食事を摂取されているかがわかるようになっています。



③サービスの利用状況

いつどのサービスがどんな治療・訓練を実施したのかわかるようになっています。訓練時の様子や次のサービス利用時に実施してほしいことを伝達できるようになっています。

④自主訓練のページ

自宅で一人で又は家族と一緒にできるように作成しています。サービス利用時のみの訓練だけではなく自宅での継続した訓練が必要な為、絵を見ながら真似することでできるようにしています。

⑤とろみ早見表

家族指導実施時に、イメージがわかりにくいトロミの硬さをわかりやすくするためのページになります。とろみが変更した際にもノートを確認して形状を確認できるようにしました。

５．終わりに

入院・老健から在宅へ

入院中・入所中に評価・訓練を行い情報を集約したお口の手帳を作成。

「施設にいた時は出来たのに家に帰ったらできない」をなくすために、継続した治療・訓練ができるようにお口の手帳を通して情報を蓄積し、本人・家族が見返して訓練が継続できるようしました。

飲み込みサポートチーム発足後、２年目を迎える25年度の課題としては、お口の手帳の活用です。

お口の手帳の活用

理由：お口の手帳を普及させたとしても、手帳を見ながらの支援を行うことを基本に行っていくことが必要です。

そのためにも、お口の手帳を全職員に周知し、ご利用者様の情報を多職種で連携を取ること（横のつながり強化）に力を入れていきます。

単一職種のみの存在では、食の改善には繋がらなくても、飲み込みサポートチームの各職種の知識を結集し、展開していくことで、１人でも多くの利用者様の「口から食べる」ことをサポートしていけるように、今後もチームとして取り組みを継続していきます。

ナースコール一体型見守りセンサー（Owl Care）の導入による成果

特別養護老人ホーム ハートハウス成城
事業所長

１．はじめに

私たちハートハウス成城には29名のご利用者様がおられ、構造としては１つの階に１ユニットずつ計３ユニットあります。他方で、夜勤職員は２名体制となっており、必然的に階の移動を伴い、職員の精神的、肉体的負担が課題となっていました。

そこで夜間帯の見守りの効率化を目的として、2021年３月よりベッドセンサーを導入していました。そして2024年３月よりベッドセンサーからOwl Careに変更することで、さらに夜間帯業務の効率化を目指すこととなりました。本発表においては、Owl Careの導入から、その運用の定着までのプロセスと、導入によってもたらされた成果をご紹介します。

	Owl Care	ベッドセンサー
睡眠状況、離床の検知	○	○
呼吸数、心拍数の検知	○	○
居室カメラ機能	○	×
ナースコール	○	×

２．取り組んだ課題

１つ目は、ベッドセンサーからOwl Careへのスムーズな移行を行い、職員が戸惑うことなく使用できるようにすることです。ベッドセンサーとあまりに使い勝手が変わってしまうと、職員にとって逆に負担がかかってしまうからです。

２つ目は、これまでの夜勤業務のオペレーションとOwl Careの使用をマッチングさせていくために、改善を行っていくことです。

３つ目は、ベッドセンサーにはなかった居室カメラ機能を活用し、夜間帯の見守り業務のさらなる効率化を図っていくことが課題となりました。

３．具体的な取り組み

記録システムで使用しているiPadにOwl Careのアプリケーションを導入しました。iPadはベッドセンサーでも使用していたので、これまでと変わらない使用環境で運用を開始することができました。

運用開始後、課題となってきたことが離床検知の遅延です。これまで使用してきたベッドセンサーは居室に設置されたナースコールのラインを使った有線のものでしたが、Owl Careでは、導入時に従来のナースコールは撤去しました。そこで、従来のセンサーと同レベルの離床検知をどうやって確保するのかが課題となったのです。こうした見守り機器の離床検知は、従来の離床センサーとは、本来同列に置くことが難しいことは、すでに明らかです。しかし、それをなんとか解決できないかと、開発者側と色々相談をしました。そして解決策の一つとして、まず、Androidベースのタブレットを導入しました。同じアプリケーションを使用するにしても、iPadよりAndroidベースのタブレットの方が、動作が速いからです。（※現在は改善し、iPadも同じになりました。）

もう一つの解決策として、離床検知をベッドセンサーだけではなく、モーション検知という居室カメラによる検知方法もあわせて使用することにしました。その際には、画像の赤丸のところのようなカメラキャリブレーションという設定が必要で、開発者側に色々ご教授頂きながら設定を行い、これで実用レベルの離床検知が可能になりました。

最後に、大型モニターをフロアに設置しました。タブレットでは、画面の大きさに制約があり、多くのご利用者様を一つの画面で見ることができませんでしたが、大型のモニターによって、夜勤職員が、受け持ちフロア全体を俯瞰することができるようになりました。

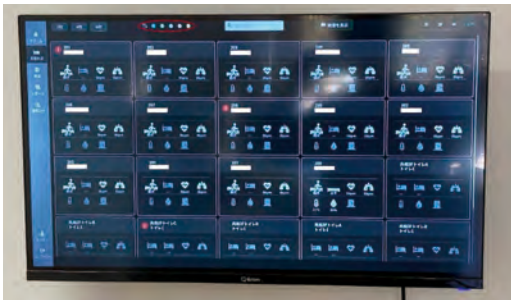
このような改善のプロセスを経て、現状では３つのデバイスを使い分けながらOwl Careを運用しています。まずiPadでは、画像のように、居室カメラ機能を使用して、転倒リスクの高い利用者の見守りを行っています。

iPad

Androidベースのタブレットは、ユニット利用者のアラーム検知に使用しています。

Android モニター

最後に、大型モニターは、利用者の全体状況を把握するのに使用しています。



大型モニター

その際、情報が煩雑にならないように、画像では少し分かりづらいですが、赤丸をしたところのラベリング機能を使い、２名の夜勤職員各々の受け持ち分の利用者だけが、表示されるように工夫しました。このモニターは動きながらでも、一目で全体状況が分かると、職員に大変好評でした。

４．活動の成果と評価

試行錯誤しながら、３つのデバイスを使用し、あるご利用者様はベッドセンサーのみで対応、また別のご利用者様はベッドセンサーと居室カメラ機能との併用と、ご利用者様の特徴に応じながら運用するスタイルになり、効率化が進みました。特に、これまでなかった居室カメラ機能による見守りは、自分が常駐しないフロアのご利用者様を目で見て見守りができるので、職員の精神的負担は大きく軽減されました。もはやOwl Careなしでは夜勤ができない、というのが職員の声です。また、Owl Careの導入は、ご利用者様の安全にも寄与しました。ベッドセンサー使用時の2023年の夜間帯の転倒転落の事故件数は10件でしたが、Owl Careを導入した2024年は５件に半減しました。

さらに、これまで夜間の事故の経緯が不明なため、例えば不眠ぎみのご利用者様はリビングで対応する、といった対策がとられがちでした。しかし、Owl Careの居室カメラの過去のログを検証することで、正確な事故の経緯を把握することが可能となりました。また、今お話しした不眠気味のご利用者様の対策で言えば、居室カメラ機能によって居室で過ごして頂きながら見守りをすることが可能になり、ご利用者様が本来の生活を取り戻すことができるようになったことも成果の一つと言えます。

５．今後の課題

まずは離床検知の精度をさらに高められるか、ということが挙げられます。これまでの経過でご説明したように、離床検知は実用レベルまで到達してはいますが、職員にとっては少しでも早く検知できた方がいいことは言うまでもありません。そのために、開発者側とAIを使用した離床予測検知システムへと発展していくことが可能かどうか検討をしています。

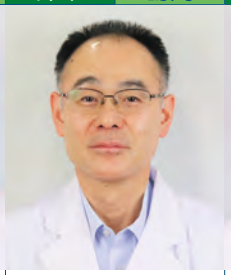
また、現状３つのデバイスを使用していますが、これを少しでも減らすことができるか、といったことも課題です。見るべきものが少ない方が、職員にとっても効率がより上がると思われます。

３つ目の課題は、看取り期での使用です。Owl Careを導入して以降、看取りケアで有効に活用することがまだできていません。心拍数や呼吸数など、どの値でアラーム検知するか、ご利用者様の状態に応じて設定することが必要になってくると思います。

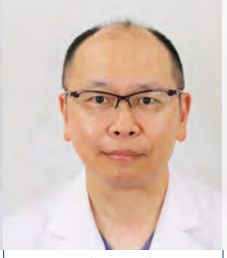
最後になりますが、ハートハウス成城ではOwl Careの導入にあたり、開発者側と連携し、職員が使いやすい環境を構築してきました。それを通して、ベッドセンサーにはなかった居室カメラ機能をフルに活用できるようになってきました。居室カメラ機能は、直接ご利用者様の居室での状況を把握することができる上、離床検知においても、機能を果たしています。

今後も、機能強化を開発者側と行いながら、オールインワンの機器として成熟させていくことで、ご利用者様・職員にとって有益な機器となるよう取り組んでいきたいと考えています。

【青藍会グループ　医師紹介】
あんの循環器・総合クリニック

外来	外来 訪問	外来 訪問	外来 訪問	外来 訪問	外来
理事長　阿武 義人 日本循環器学会専門医 日本内科学会認定内科医 日本医師会認定産業医 日本医師会認定健康スポーツ医 THP健康測定研修修了医 介護支援専門員 認知症サポート医 緩和ケア研修会受講修了	院長　亀田 秀樹 日本脳神経外科学会専門医 日本認知症学会専門医・指導医、 認知症サポート医 やまぐちPREMIUMオレンジドクター	副院長　小野 史朗 日本循環器学会認定循環器専門医 日本超音波医学会超音波専門医・指導医 日本内科学会認定内科医	福谷 敏彦 日本外科学会認定医 麻酔科標榜医 麻酔科学会認定医・専門医	藤谷 薫 日本外科学会認定医 日本医師会認定産業医 日本医師会認定スポーツ医	名西 史夫 日本内科学会認定内科医 日本腎臓学会専門医 日本透析医学会専門医 日本医師会認定産業医
訪問	外来 訪問	外来	外来	外来	外来
					
萬納寺 洋道 日本脳神経外科学会専門医 日本脳卒中学会認定脳卒中専門医	村田 和弘 日本リハビリテーション医学会指導医・専門医・臨床認定医 日本プライマリ・ケア連合学会指導医・家庭医療専門医 日本臨床栄養代謝学会認定医 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会認定士 日本嚥下医学会嚥下相談医	宮川 一平 日本内科学会認定内科医 日本内科学会総合内科専門医 日本内科学会指導医 日本リウマチ学会専門医 日本リウマチ学会評議員	川井 元晴 元山口大学医学部教授 日本認知症学会認定専門医 日本神経学会認定神経内科専門医	勝又 野歩 膠原病内科	阿武 雅子 内科医
訪問・眼科	訪問・整形外科	訪問・整形外科	訪問・皮膚科	訪問・耳鼻科	訪問・形成外科
二宮 元 日本眼科学会眼科専門医 日本抗加齢医学会専門医	井原 成男 整形外科	倉員 忠弘 日本整形外科学会専門医 日本整形外科学会認定リウマチ医 日本医師会認定産業医	原口 祐子 皮膚科	猿渡 雄吉 耳鼻咽喉科	志田山 了一 形成外科
訪問・歯科	訪問・歯科	訪問・歯科			
川野 多加子 歯科	藤本 勝廣 歯科	荻野 健一 歯科			

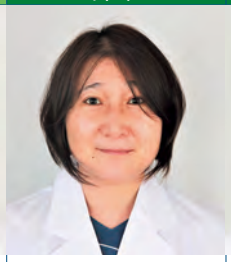
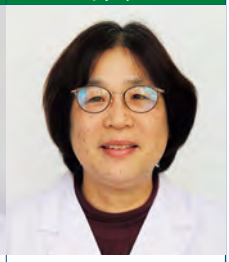
ハートクリニック南山口

外来 訪問	外来 訪問	訪問	訪問・整形外科	訪問・皮膚科	訪問・眼科
					
院長　松村 孝司 日本脳神経外科学会専門医 介護支援専門員	副院長　立石 裕樹 日本内科学会認定内科医 日本循環器学会循環器専門医 日本心血管インターベンション治療学会認定医 日本心臓リハビリテーション学会心臓リハビリテーション指導士	鵜池 直邦 日本血液学会専門医、指導医	井原 成男 整形外科	専徳 健太 皮膚科	束田 崇夫 眼科

訪問・形成外科	訪問・耳鼻科
森下 有紀 形成外科	伊藤 博子 耳鼻咽喉科

4月27日（日）　9：00～18：00
休日当番

ハートこどもクリニック新山口

外来 訪問	外来	外来	外来
			
院長　向江 徳太郎 日本小児科学会小児科専門医 日本救急医学会救急科専門医	友近 喜代子 小児・発達外来	岡　桃子 日本小児科学会小児科専門医 日本小児神経学会小児神経専門医	桑原 奈津子 日本小児科学会小児科専門医

ハート掲示板

●LINE公式アカウント 友だち募集中！

青藍会グループでは、2025年4月号より広報誌の発信をLINEへと移行させていきます。多くの皆様が日常的に利用するLINEから、公式サイト・お問い合わせフォーム・広報誌などに簡単にアクセスできるようになっています。また季節に応じた情報発信、イベント・キャンペーンのご案内等も行っていきますので、是非ご登録ください。

友だち募集中！
登録はこちらから

寄付・寄贈のお礼

＜寄付者のご紹介＞
牛田 雅実 様、長田 紀子 様、小林 真理子 様、株式会社セキュアード 様、株式会社 TEORY 様、株式会社 フローラHD 様、矢田 フミヱ 様、ClipLine株式会社　カスタマーサクセス部 様

社会福祉法人青藍会へご寄付・ご協力いただきありがとうございました。このたびの寄付金については、社会福祉法人の貴重な財源として、社会貢献活動等に役立たせていただきます。
ご協力いただいた皆様のお名前はハートホーム中央・ハートホーム山口玄関に「青藍会の樹」として掲示しています。今後も、引き続きご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。
寄付についてのお問い合わせは、**総務課（T 083-933-6000）**までご連絡ください。

【2025年4月　外来・訪問診療医師予定表】

			診療科	月	火	水	木	金	土
外来	あんの循環器・総合クリニック	午前	循環器内科	阿武 義人 小野 史朗	阿武 義人 小野 史朗	阿武 義人 小野 史朗	小野 史朗	阿武 義人	山大医師
			脳神経外科 （もの忘れ外来）		亀田 秀樹				亀田 秀樹
			内科	藤谷 薫	藤谷 薫	藤谷 薫	藤谷 薫	藤谷 薫	藤谷 薫
			総合内科	福谷 敏彦			名西 史夫		
			膠原病内科					勝又 野歩	
			皮膚科			11:00～ 原口 祐子			
			眼科				11：00～ 二宮 元		
		午後	循環器内科	阿武 義人 小野 史朗	阿武 義人 小野 史朗	阿武 義人 小野 史朗		阿武 義人	
			脳神経外科 （もの忘れ外来）					亀田 秀樹	
			内科	藤谷 薫	藤谷 薫	藤谷 薫		藤谷 薫	
			整形外科					井原 成男	
	新山口	午前	小児科	向江 徳太郎	向江 徳太郎	向江 徳太郎	向江 徳太郎	向江 徳太郎	桑原 奈津子
			発達相談外来	友近 喜代子		友近 喜代子		岡 桃子	
		午後	小児科	向江 徳太郎	向江 徳太郎	向江 徳太郎	向江 徳太郎	向江 徳太郎	桑原 奈津子
			発達相談外来	友近 喜代子				岡 桃子	
	南山口	午前	脳神経外科 （もの忘れ外来）	松村 孝司		松村 孝司	松村 孝司	松村 孝司	松村 孝司
			循環器・内科		立石 裕樹		立石 裕樹		立石 裕樹
		午後	脳神経外科 （もの忘れ外来）	松村 孝司		松村 孝司		松村 孝司	
			循環器・内科	立石 裕樹	立石 裕樹			立石 裕樹	
	老健			萬納寺 洋道		萬納寺 洋道		萬納寺 洋道	
訪問	総合内科			亀田 秀樹	亀田 秀樹	亀田 秀樹	亀田 秀樹	亀田 秀樹	
					藤谷 薫		藤谷 薫	小野 史朗	
				福谷 敏彦	福谷 敏彦	福谷 敏彦	福谷 敏彦	福谷 敏彦	
					松村 孝司			松村 孝司	
				立石 裕樹		立石 裕樹		立石 裕樹	
				鵜池 直邦		鵜池 直邦	鵜池 直邦		
	眼科			第１・第３週 束田 崇夫			二宮 元		
	整形外科				倉員 忠弘	井原 成男		井原 成男	
	皮膚科			原口 祐子		原口 祐子 専徳 健太	原口 祐子	原口 祐子	
	耳鼻咽喉科			第２・第４週 伊藤 博子			猿渡 雄吉		
	形成外科				森下 有紀	志田山 了一			
	小児科			向江 徳太郎	向江 徳太郎	向江 徳太郎	向江 徳太郎	向江 徳太郎	
	VE（嚥下内視鏡検査）				村田 和弘				
	歯科			川野 多加子	川野 多加子	川野 多加子	川野 多加子	川野 多加子	
				藤本 勝廣	藤本 勝廣	藤本 勝廣	藤本 勝廣	藤本 勝廣	
				荻野 健一	荻野 健一	荻野 健一	荻野 健一		
	訪問薬剤指導			○	○	○	○	○	○
	訪問栄養指導			○	○	○	○	○	○
	訪問リハビリ			○	○	○	○	○	○

山口エリア

■あんの循環器・総合クリニック　T083(924)1151　■ハートこどもクリニック新山口　T083(976)2450　■ハートクリニック南山口　T083(988)3333
■おごおり薬局　T083(974)1660　■メディキッズ山口　T083(941)5311　■メディキッズ新山口　T083(976)2450

■青藍会在宅医療支援センター山口　訪問看護ステーション	T083 (933) 6020
■青藍会在宅医療支援センター山口　定期巡回・随時対応型訪問介護看護	T083 (934) 7600
■青藍会在宅医療支援センター中央　定期巡回・随時対応型訪問介護看護	T083 (941) 6740
■青藍会在宅医療支援センター新山口　訪問看護ステーション	T083 (976) 2400
■青藍会在宅医療支援センター新山口　定期巡回・随時対応型訪問介護看護	T083 (976) 2400
■青藍会在宅医療支援センター新山口　看護小規模多機能型居宅介護	T083 (976) 2400
■青藍会在宅医療支援センター南山口　訪問看護ステーション	T083 (988) 3300
■青藍会在宅医療支援センター南山口　看護小規模多機能型居宅介護	T083 (988) 3300

東京エリア

■青藍会在宅医療支援センターハートハウス成城　定期巡回・随時対応型訪問介護看護　T03 (3416) 4160

理念：私たちは、医療・保健・福祉の分野で、地域の方々の生活を生涯にわたって支えることに最善を尽くし、そして、そこで働いていることに誇りを持ちます。

※コンプライアンス室：この広報誌の写真は、ご本人に承諾を得た上で掲載しております。翻訳・引用・要約・開示・配布・書籍等への転載等を禁止します。

青藍会グループ広報誌　発行人／阿武義人　編集／広報課
2025年4月1日発行　第308号
〒753-0813 山口市吉敷中東1-1-1　T083(933)6000(代表)
印刷・製本／株式会社マルニ